

バスケットボール部員が私を 一人前にしてくれた

旧職員 細川 磐

昭和二十九年四月一日、夜行列車で東京から京都に来了。早すぎて学校の正門は閉ざされて静かだった。幸いなことと言っているのだろうか、門柱横のトゲのあるカラタチの木立に人が入ってもよさそうな隙間が空いていた。そこから入ってしまった。

それが山城高校就任一日目の朝であつた。はじめからハレンチな行動で我ながらあきれた。

約束の時間に校長先生、教頭先生にお目にかかれて、ご指導いただいた。教頭先生は気軽にしゃべってくれ「バスケットボールの指導者が大病で入院した。その後任だから頼むよ」と強調された。

少し日にちが経つてからのことであるが、バスケットボール部活動指導に意気込んでいるのが、どうも空回りしているのではないかと感じだした。技巧的でフォーメーション中心の練習をしていた二、三年生には、単純な動きで早さを要求する私の練習は受け入れられなかった。内面的であつたがいつしか、一

年生と一緒に基礎練習とプレス・デフェンスをやることに楽しみを感じ出していた。

それから、その積み重ねが実を結び、三年目に西日本高校で優勝、五年目にインターハイ優勝、六年目に東京国体優勝、少し間をおいて岡山国体優勝と続いた。嬉しかった。

この頃はいい時代であった。部員が教科の成績が悪いとその教科担当の先生が特別指導などとして協力してくれた。また、体育館に先生方が集まって部員と交歓ゲームをして下さった。先生と部員との人間関係が密になり教室で居眠りしないよう指導して貰っていた。

薄暗い部室もまた忘れることができない。異様な臭いがしたがその部室に入って部員と同じ気分で雑談をして楽しんだ。若かった。ある時、チームのキャプテンを務めていた部員がほかの部員の話題について行けないと語りかけてきた。下世話なことかと耳を立てていたら、小さな声で「ナガシマシゲオって人はどういう人ですか」と聞いてきた。耳に口をあてるように「野球の名選手だよ」と言ってやったら薄暗い中につこりした。部活動を最後まで続け、京大に合格した堅物だったからさもありなんと思った。人はいろいろな特性を持っている。バスケットボールの指導を精一杯やったことで部員から学んだことは限りなく大きいものであった。